論　説

「南京要人印象記」から呉濁流の大陸経験を再考する

伊　蒙楽

はじめに
第1節　本論の問題意識とこれまでの呉濁流研究について
第2節　呉濁流の南京要人に対する印象の変化――「南京要人印象記」から『台湾連翹』へ
第3節　呉濁流の南京要人に対する印象が変化する原因について
終わりに

（要約）
「南京要人印象記」は呉濁流が大陸から台湾に戻った翌年に『台湾芸術』に連載した作品で、主に南京で面会した南京国民政府要人について描いたものである。彼の大陸経験を考察する上で貴重な資料だといえるが、後の『呉濁流作品集』などで「南京要人印象記」のことがほとんど言及されておらず、現在も研究されずに呉濁流研究の空白となっている。興味深いことに、呉濁流の最後の回顧録である『台湾連翹』にも南京国民政府要人との面会やその印象が記述されているが、その内容は「南京要人印象記」と大きく異なっている。本稿は主に「南京要人印象記」と『台湾連翹』を比較分析しながら、「南京要人印象記」を切り口に、これまで重視されてこなかった呉濁流の大陸経験を再考する。「南京要人印象記」と『台湾連翹』の比較を通して、6名の南京要人たちに対する呉濁流の印象の変化には、主に3つの種類が存在しているとわかる。さらに、呉濁流は『台湾連翹』の創作の時点から率直に歴史を記述するようになったことや、「南京要人印象記」は発表のために一定程度の妥協をしたが、戦略的な書き方によって時勢への迎合を可能なかぎり避ける記述をしていることがうかがえる。

はじめに

1945年、ポツダム宣言を受諾し、太平洋戦争が終わると共に、台湾での日本統治は過去のものとなった。台湾人も日本籍を失い、中華民国政府に返還された。日本政府のコントロールから離脱し、日本統治下の台湾人の苦しみを描く作品もようやく出版の機会を得て、次から次へと刊行された。『アジアの孤児』[1] もそのなかの一つである。

『アジアの孤児』の作者である呉濁流は、日本統治が始まって5年たった1900年に、新竹県新埔鎮で生まれた。36歳の時に文学好きの日本人の女性教員に勧められて短編小説「海月」を書き、創作人生をスタートさせる。実体験に基づいて創作し、真実を伝えることに責任感を持とうとする[2] 呉濁流の作品に歴史性が溢れていることは、彼の作品が台湾のみならず日本、韓国、中国でも研究され、注目される原因の一つだろう。

本稿で扱うテクストは主に2作である。『台湾芸術』に連載していた「南京要人印象記」と最後の作品と言える『台湾連翹』[3] である。

呉濁流は日本人教員と紛争を起こし、教員の仕事を退職したことをきっかけとして、1941年1月から1942年3月まで、1年3ヶ月ほど中国の南京に渡り、記者として暮らした経験がある。中国大陸から台湾に戻った呉濁流は、自身と同じく新竹で生まれ、当時『台湾芸術』の編集長を務めていた江肖梅[4] との縁で、文章を雑誌『台湾芸術』に発表する機会を得た。江肖梅は呉濁流

の国語学校師範部の先輩である。また黄郁綺[5]の記述によれば客家語を独学で学んだとあるので、確証はないものの、江は客家語が話せるが、客家人ではないと推測できる。呉濁流は大陸での見聞を文章として1942年10月から翌年9月まで、10回に分けて雑誌『台湾芸術』に連載した。第1回から4回までは「南京雑感」という名で南京の風景や風俗などが描かれ、6回目以降は「南京要人印象記」として汪精衛、陳公博、褚民誼、周仏海、陳羣、梁鴻志の6名の南京国民政府要人との面会や感想を記録している[6]。以上の11篇の文章は呉濁流の大陸経験を検討する際、最も重要な資料だと考えられる。

また、同じく大陸経験や南京国民政府について言及している回顧録『台湾連翹』は、呉濁流の幼少期である日本統治初期から光復後の1949、1950年までの歴史を記載したものだ。1971年9月から書き始め、3年3ヶ月をかけて1974年12月29日に完成した作品である[7]。1973年2月18日の鍾肇政への手紙のなかで記述しているように、林鍾隆に依頼して[8]、第1章から第8章までを中国語に翻訳し[9]、1973年4月より『台湾文芸』に連載した。1975年1月に、脱稿した『台湾連翹』を鍾肇政に託したが、政治的に敏感な時期であり、後半部分は10年或いは20年後に出版せよという遺言によって発表を10年間凍結させた。1987年に鍾肇政による中国語の翻訳が台湾文芸出版社と南方叢書出版社からようやく出版される。

本稿はこれまでほとんど知られることなく、研究もされていない「南京要人印象記」を切り口として、呉濁流の最後の回顧録『台湾連翹』に至るまで呉氏の大陸経験を再考するものである。

第1節　本論の問題意識とこれまでの呉濁流研究について

呉濁流の創作経歴を振り返ると、1936年から創作を開始し、逝去するまで文学活動を続けるが、1937年から大陸より台湾に戻る1942年までの間は一時期停筆していたことがある。その原因を彼は「無花果」のなかで以下のように述べている。

> その時はすでに齢三十七、おのれを省みてまったく日暮れて道遠しという感じで、日本文をこなすにはさらに十年の勉強がいる。学生時代、数学や物理に対しては自信があったが、日本文の綴り方では「甲」をもらったおぼえはない。どう考えても文士にはなれそうもない。
> 要するに私の文学熱は受動的であって、小説作りは一時の出来心で、いたずらにすぎなかった。一方『台湾新文学』は発禁に発禁を重ねて財政が困難となり、ついに停刊になってしまった。発表する機関もなくなり、文学を志すことはいっそう困難になった[10]。

以上から、呉濁流は1937年前の文学創作について、「受動的」、「一時的出来心」だと述べていることがわかる。彼は大陸から戻った年に、南京での見聞を整理して、創作を再開する。その後、『胡志明』[11]、『ポツダム科長』[12]、「無花果」、『台湾連翹』などの作品を続けて発表し、のちには雑誌『台湾文芸』も創刊して、文学活動に精力的に取り組み、逝去まで筆を置くことはなかった。こうした積極的な態度は1937年以前とは全く異なっている。

なぜ呉濁流は大陸から台湾に戻った後、文学創作に対する態度が激変したのか。こうした観点に立てば、呉濁流の大陸経験に関する考察に価値が見出されると考えられる。また、もう一つ見落とすことができないのは、呉濁流が 1942 年文学活動を再開した始めた際に、『台湾芸術』で 10 回に分けて連載していた大陸の見聞に関する文章である。

具体的な篇名を整理すると、以下の表 1 のようになる。

表 1「南京雑感」と「南京要人印象記」篇名表[13]

	文章名	期号	頁数	発行日
南京雑感	南京雑感（一　南京の相貌）	第 31 号	28–29	昭和 17 年 10 月 31 日
	南京雑感（二 南京の第一印象）	第 31 号	29	昭和 17 年 10 月 31 日
	南京雑感（三　三畏里の閑話）	第 32 号	30–31	昭和 17 年 12 月 1 日
	南京雑感（四　章公館に於ける閑遊）	第 33 号	34–35	昭和 17 年 12 月 28 日 [14]
	南京雑感（五　南京の明朗色）	第 34 号	38	昭和 18 年 1 月 30 日
南京要人印象記	国府要人印象記（汪精衛）	第 36 号	32–34	昭和 18 年 4 月 1 日
	南京要人印象記（陳公博）	第 37 号	28–29	昭和 18 年 5 月 2 日
	南京要人印象記（褚民誼）	第 38 号	26	昭和 18 年 6 月 1 日
	南京要人印象記（周仏海）	第 39 号	34	昭和 18 年 7 月 1 日
	南京要人印象記――陳内政部長の豪華ぶり	第 40 号	32	昭和 18 年 8 月 1 日
	南京要人印象記――梁院長の大人ぶり	第 41 号	34	昭和 18 年 9 月 1 日

先述したように、『台湾芸術』で連載された文章は主に 2 つの部分に分けられ、合わせて 11 篇の文章は第 31 号から第 41 号にわたって 10 回に分けて連載されたが、そのなかで、第 35 号だけは発表されていないことがわかる。その前半 4 回は「南京雑感」という名で南京の風景や風俗などを描き、後半 6 回は「南京要人印象記」として南京国民政府要人との面会や感想を記録するものである。また、第 5 回の汪精衛のみは「国府要人印象記」という表記されていることがわかる。

また、「南京要人印象記」は、『大陸新報』の記者という身分から脱した呉濁流が南京汪精衛政府の要人との面会を記録し、彼らへの印象を描いた呉濁流の大陸経験の重要な資料として、大きな意味を持っていると考えられる。興味深いことに、「南京要人印象記」を発表された 2、30 年後に小説家として文学創作に集中してからの呉濁流の回顧録である『台湾連翹』のなかでは、南京で会った南京国民政府の要人たちに再び言及しているが、いずれも「南京要人印象記」に書かれた評価とだいぶ異なっていることである。そこで、ある疑問が生じる。呉濁流の前後の作品における南京要人たちに対する印象はどのように変わったのか。なぜ南京要人たちに対する印象は変わったのか。その印象に対する変化から、何を新たに見出せるだろうか。

また、周知のように、『アジアの孤児』であれ、『無花果』であれ、呉濁流の作品は何度も翻訳・再版を経ている。「南京雑感」もそうである。1966 年廣鴻文出版社により発刊した『呉濁流選集』や後ほど張良澤が編集した『呉濁流作品集――巻④ 南京雑感』は『台湾芸術』に掲載されている「南京雑感」の大部分を翻訳・収録したが、同時期に同じ雑誌に発表されていた「南京要人印象記」は後の呉濁流の作品集に収録されず、中国語にも翻訳されないまま見落とされている。呉

濁流研究でもほとんど言及されない。「南京要人印象記」が見落とされるのは何故なのだろうか。ただの偶然であろうか。あるいはもっと深い原因があるのだろうか。先述の疑問に加え、こうした疑問も自ずと生じてくる。

本稿は呉濁流の作品である「南京要人印象記」と『台湾連翹』の比較分析をしながら、上述の一連の問いに応答しつつ、呉濁流の大陸経験を再考する。

また、呉濁流に関する研究は台湾をはじめ、日本、中国大陸、韓国などの各地域で注目され、先行研究も多い。しかしながら、1996 年に簡義明が以下のように述べている点は注目に値する。

> 私たちはこうした資料をつぶさに見る時、研究の主題の重複性があまりに高いことに気がついた。例えば、孤児意識や植民経験から呉濁流の小説を解読するのが主要な切り口なのだが、これは別にこうした考え方が間違いということではないものの、多くの者がここに力を入れてしまうと、比較的新しい研究意義が開拓されないであろう[15]。

簡義明が述べたように、現在の呉濁流研究は重複性が高く、『アジアの孤児』や作者のナショナル・アイデンティティを論じたものが多い。これまで重視されてこなかった呉濁流のテクストや新たな研究方向に力に入れる必要がある。

本稿の中心点の一つである、呉濁流の大陸経験に関する先行研究も多くはない。例をあげると、林柏燕の「呉濁流的大陸経験」[16]、徐千惠の「日治時期台人旅外遊記析論――以李春生、連横、林献堂、呉濁流遊記為分析場域」[17]、陳室如の「日治時期台人大陸遊記之認同困境：以連横《大陸遊記》与呉濁流《南京雑感》為例」[18] はいずれも呉濁流の大陸経験に関して論じてはいるが、使用しているテクストは一次資料である『台湾芸術』に連載された「南京雑感」ではなく、戦後に翻訳された中国語版の『呉濁流作品集――巻④ 南京雑感』である。さらに呉氏の大陸経験を究明する際に不可欠な資料である「南京要人印象記」については言及すらしていない。

これまで『台湾芸術』に掲載された文章を使用した先行研究は白筱薇の「呉濁流的大陸経験及其相関作品研究」[19] だけである。この論文は呉濁流の作品における彼の大陸経験についての部分を論述しているが、「南京要人印象記」のなかの「陳公博」篇については言及がなく、資料収集の点で不完全である。また、「南京要人印象記」も論文の重点ではないためか詳しく論述はしていない。

以上の先行研究から、呉濁流の大陸経験を論じたものは数少ないながらも存在しているが、そのほとんどが翻訳された中国語版の『呉濁流作品集――巻④ 南京雑感』をテクストとしていることがわかる。最も重要な『台湾芸術』に連載された文章を論じたものは 1 篇しかなく、「南京要人印象記」について論じた論文は全くない。研究の空白であることは疑いないであろう。

本稿はこうした研究状況をふまえて、呉濁流の大陸経験と直接的な関わりを持つ「南京要人印象記」について論述する。「はじめに」と「終わりに」以外に、2 節に分けて分析を行う。第 1 節では「南京要人印象記」に描写された南京国民政府要人の人物形象と『台湾連翹』の異なる描写について比較する。第 2 節は「南京要人印象記」で言及された事件や時間を手がかりとして、

その他の南京国民政府に関する資料、例えば『周仏海日記』[20]、『汪精衛生平記事』[21]なども参考にしながら、呉濁流が前後の作品で同一人物に対して異なる評価を下した原因を探究する。また、こうした作業を通して、呉濁流の作品における「南京要人印象記」の位置付けや見落とされている原因を考察することも本稿の目的である。

第 2 節　呉濁流の南京要人に対する印象の変化――「南京要人印象記」から『台湾連翹』へ

1942 年、呉濁流は中国大陸から台湾に戻った後、雑誌『台湾芸術』に「南京雑感」というタイトルで南京での生活経験と見聞を投稿し始めた。4 回連載した後で一旦停止し、2 ヶ月後に南京国民政府の要人たちの印象を中心とした「南京要人印象記」を続けて 6 回連載した。繰り返しになるが、最初の汪精衛に関する 1 篇は「国府要人印象記」であったが、その次の 5 篇は「南京要人印象記」というタイトルとなっている。この 6 つの文章はいずれも南京国民政府要人を記録した文章で、発表時期も連続していることから、本稿では統一して「南京要人印象記」と称することにする。

前節でも述べたように、「南京要人印象記」に記載されている汪精衛、陳公博、褚民誼、周仏海、陳羣、梁鴻志の 6 人は、1974 年 12 月に脱稿した呉濁流の最後の回顧録『台湾連翹』のなかでも言及されているが、「南京要人印象記」における記述とはかなり異なっている。では両者の記述は一体どのような異同があるのか、本節ではそれを論述する。

1.「南京要人印象記」から『台湾連翹』への変化

⑴ 汪精衛

●「南京要人印象記」[22]

「南京要人印象記」における人物の連載の順番について、呉濁流は「兎に角、汪主席を初めに比較的印象の鮮やかの方から順を逐うで書いて見度い」[23]と述べていることから、汪精衛に対する印象は南京要人のなかで最も鮮明であると考えられる。また 4000 字近くの紙幅を割いている汪精衛篇は「南京要人印象記」のなかで最も文字数が多い。

汪精衛篇は「汪主席に対する初印象」、「汪主席の側面観」、「詩人としての汪主席」の 3 つの部分から構成されている。呉濁流が南京国民政府の主席であった汪精衛に初めて会ったのは南京の上海路にある中独文化協会で開催されていた全国中央宣伝会議の席であった。呉濁流は「例によって記事を取りに自動車で中独文化協会の玄関に差しかかると玄関先の取締りが意外にきびしかった」と記している。そして「大礼堂（講堂）の扉を静かに開けて内へ這入れば意外にも汪主席が正面の演壇に立って」、「講老実話」[24]というテーマの講演をしていた汪精衛の姿を見た。呉濁流は「理論が整然として無駄な修飾辞を用いず洗練された言葉を用いて悠然迫らざる態度で諄々と所信を述べる所は丁度先生が弟子を導くように感じるのであった」と評価している[25]。

また、1941 年 11 月 9 日より 11 日までの 3 日間で開催された「第四回全国中央委員会議」のために、9 日の朝に、南京政府要人たちは中山陵に赴いた。記者である呉濁流も中山陵に赴いて

おり、その日のことが詳細に記されている。呉濁流の目の前を黒い漢服を着た汪精衛が通りすぎた。靴下がちらと目に映ったが、それは南京の市場には何処でも売っている木綿の靴下であった。呉濁流はこのことに対して、「此程の身分に拘らず贅沢をされない」、「その質素ぶりには益々敬意を表せざるを得ない」と記している[26]。

実際に汪精衛と会った時の記述は以上の 2 箇所であるが、文章のなかでは汪精衛の経歴や彼が作った詩も載せられており、「彼の所信こそ、鉄石の如き堅さがあると感じた」[27] といった称賛の言葉がある。

●『台湾連翹』

『台湾連翹』のなかで汪精衛に関する描写は多くはない。「汪精衛は一人の傑出した人物かもしれないが、彼の周囲は、完全に人材がいないと言える」[28] というもの以外、以下の 1 箇所のみである。

> 私はかつて西島社長、上野編集部長と一緒に汪精衛に送る肖像画のために汪公館に訪問し、汪主席と話し合ったことがある。汪精衛は人に優しく頗る長者の風格がある。それゆえ、思わず自分の先生と対面しているような気がする[29]。

こうした記述から、呉濁流は「南京要人印象記」と『台湾連翹』では、汪精衛に関して多少異なるものの、基本的には称賛する態度は変わらないことがわかる。また、「南京要人印象記」のなかで、汪精衛の講演を聞いた時にも「先生が弟子を導くように感じる」といった描写がある。呉氏の汪精衛に対する印象は変わっておらず、一貫して「先生のようである」な印象を持っており、尊敬の気持ちがうかがえる。

⑵ 陳公博

●「南京要人印象記」[30]

『台湾芸術』での連載の順番に従えば、2 番目に描かれた陳公博は呉濁流にとって比較的印象が鮮明であったことがうかがえる。さらに、文章の字数から見れば、周仏海篇と陳群篇が 1000 字近くなのと比べると、2000 字近い陳公博篇に関する描写はより具体的である。

「南京要人印象記」の陳公博篇は「陳公博氏の来朝」、「陳公博氏の明朗さ」、そして「陳公博氏の経歴」の 3 つの部分で構成されている。

1941 年の夏、南京の中独文化協会で開かれた旅京同郷会の座談会で、呉濁流は同会の名誉会長である陳公博と会っている。陳公博に対する印象は「瀟気に燃え、実直豪健にして冒険進取的気象に富む客家系統の血を多分に受け継いでいる」、「しかし氏は客家の気質として頑固な執拗さがあるであろう」というものであった[31]。

また、陳公博が九州大学で講演したことについても言及し、「その論文は該博な知識を以て現実に即してよく研究したものを明快に論じている。中日経済合作についても抽象的理念ではなく何処までも具体的数字を挙げて論じている所は政治家と共に学者とも言えるであろう」[32] と評価している。

ここでは、陳の経歴が記述されているだけでなく、彼が外交活動で日本に赴いたことも記されている。陳氏個人に対しては、「灝気」、「実直豪健」、「学者」と高い評価をしている。

●『台湾連翹』

陳公博と対面した旅京同郷会のことは『台湾連翹』でも以下のように言及されている。

> 私は以前陳公博という人と会ったこともある。当時陳公博は上海市長であり、重慶で実業部長を務めていた。私は「旅京客家会」で彼と会ったが、彼は私と同じ客家人であるため、彼に対して特別な好感を持っている。彼は非常に洒落ており、性格は朗らかで率直、口がうまく、学問も教養もある人間であった。
>
> 私はかつて彼が九州大学で講演した、対日本経済合作についての論文を読んだことがあり、実に見解があって、感銘が深い意見である[33]。

「南京要人印象記」と、『台湾連翹』のどちらも、陳公博に対してはほとんど同じような内容を述べていることから、呉濁流は陳公博との対面は多くなかったと思われる。一方で、陳公博に対しては好感を持っており、「実直豪健」、「学者」などの印象は変わっていない。

⑶ 褚民誼

●「南京要人印象記」[34]

汪精衛、陳公博と比べると、褚民誼篇の字数は少なく、汪精衛篇の3分の1ほどでしかない。主に「仏教信者」であること、「大極操の創案者」であること、そして革命に対し「鉄火の熱情」を持っていることを述べている。

呉濁流が最初に褚民誼を訪問したのは1941年で、「氏が外交部長から初代駐日大使に栄転され南京を出発する前日」であった。その次は1942年の春で、褚民誼の日常生活を撮影するために公館を訪れている。「肩幅が広くて頑強な体躯が堂々としていて、秘書張超を随へて入って来た。みっしりと握手された時、氏の掌の大きさと柔らかさには何とも云えない感じがする」と述べている。また、以下のようにも述べている。

> 実に朗かで子どもの如く天真爛漫であった。（中略）氏は大へん温厚で国府要人中、尤も調和性に富み、八面玲瓏どの人にも好感を與えるが故に重慶の林森と好一對で人事上なくてはならん人である。此の調和性は恐らく此の天真爛漫から産まれたのであろう[35]。

また、鶏鳴寺の茶館で静かにじっと玄武湖の水をみつめていたという褚民誼のエピソードに言及しながら、呉濁流は以下のように述べている。

> それこそ、英雄の閑日月と云うべきであろう。凡そ中国要人は一概に餘裕がある。忙しい生活の中に常に餘裕があり、如何なる大事なことをなすにもあせらざる所に特徴がある。一見如何にも呑気そうに見えても内心燃える如き愛国心が横溢して平和運動に対しては身命を

賭して闘い、外見柔和にして内には鉄火の熱情を藏しているのである[36]。

以上に述べたように、褚民誼に関する記事は多くはないが、「天真爛漫」、「子どもの如く」、「調和性に富み」、「八面玲瓏」、「外見柔和、内には鉄火の熱情を藏している」といった印象を述べている。

●『台湾連翹』

『台湾連翹』のなかで褚民誼については「汪夫人の妹婿である褚民誼はお人好しであり、いつも念仏を唱えているため「大孩子」という渾名があり、確かに渾名の如く、大きな子どものようである」[37] と述べている。

また、「鶏鳴寺の喫茶店に座って、静かに玄武湖の水をじっと見っていたことは彼がよく知られていることである」[38] という「南京要人印象記」のなかでも記述されたエピソードに再び言及しているが、これについての褒め言葉はない。

また、次のような記述も存在する。「彼が外交部長を務めていた時、私は彼と一回対面し話したことがある。彼の発音は、田舎っぽくて嫌悪の気持が起きる」[39]。ここから褚民誼に対する「子どもの如く」という印象は変わっていないものの、「南京要人印象記」で「英雄の閑日月」と形容したことは、『台湾連翹』では評価されていないことがわかる。そしてかつては「調和性に富み」、「八面玲瓏」と描かれた褚民誼に対して「彼の発音は、田舎っぽく嫌悪の気持が起きる」と前後の評価が変わっている。

⑷ 周仏海

●「南京要人印象記」[40]

周仏海篇は「南京要人印象記」のなかで最も短い１篇であり、字数は汪精衛篇の４分の１しかないが、『台湾連翹』では比較的記述が長くなっている。周仏海篇は「周仏海氏の容貌」、「周仏海の経歴」の２つの部分で構成されている。

「南京要人印象記」によると、呉濁流と国府行政院副院長兼財政部長である周仏海との対面は昭和十六年の夏であった。大陸新報創立２周年の記念に、矢島画伯が描いた半等身大の肖像画を周仏海に贈るために、周公館で会っている。その日は西島支社長と一緒に行くはずであったのが、突然呉濁流は単独で会うことになったのである。その時のことについて以下のような描写がある。

やがて周部長が一人飄然と客間に現われ、長い漢服をつけて非常に若々しい感じがするのであった。額が広くて稍々卵形に見える顔は血色がよくて美貌な好男子であった。

早速贈呈の挨拶を簡単に述べると、周部長は「有り難う」と云って直ぐ絵の方を見た。そして「うまいなぁっ」と感歎の声を漏した。（中略）

周部長は頗る満足した有様で尚も背景に見とれていた。側に居る彭参事は人物について「顎から下は若か過ぎるように見える」と云ったが氏は黙って答えないで近づいて見たり、離れて見たりしていた[41]。

以上のように、周仏海に関する記述は短く、周の経歴を述べた以外は、容貌を称賛していることがわかる。

●『台湾連翹』

「南京要人印象記」と異なり『台湾連翹』のなかでは、以下のように述べている。

> 私は大陸新報の命令を受け、代表として、日本のある画家が描いた周仏海の肖像画を贈るために、周公館に行ったことがある。彼は日本京都大学経済系の卒業生で、態度がかなり驕っていて、挨拶もしなかった。もし私が日本人であれば、彼は必ず懇ろにもてなしていたであろう。日本人は欧米人の前で、頭をあげないが、アジア系の有色人種に対して、西洋人のように傲慢で、人を軽蔑する癖がある。（中略）もちろん周仏海も同様で、自分は中国人ではあるが、中国人の存在を認めない[42]。

かなり皮肉を述べている。厳しい言葉で周仏海を批判することから、呉濁流が反感を持っていることがうかがえる。その点を踏まえると、周仏海に対する前後の態度はかなり異なっていることがわかる。

⑸ 陳羣

●「南京要人印象記」[43]

陳羣篇は前 4 篇と異なって、「南京要人印象記―陳内政部長の豪華ぶり」というサブタイトルがある。長い文章ではないが、彼の経歴を紹介する以外に、呉濁流は 2 回陳羣と会ったことを記している。

> 常に漢服を召して支那人の好まざる坊主刈を好んでするのが内政部長陳群である。氏は福州の産れで客家系統で豪快な詩人である。十数万巻の図書と擁して酒を飲み、美女に侍らせて読書三味、日に本を一冊読み、且つ文章を一篇づゝ綴る勢力家である[44]。

また、陳羣篇で記載されている 2 回の対面は、第 1 回は 1941 年の夏に西島支社長、上野編輯部長と一緒に陳羣の招宴に預った時である。第 2 回は 1942 年の春、孫文記念日の前日に、内政部の応接室で中澤君と一緒に 12 年間孫文の秘書を務めていた陳羣を訪問した時のことである。呉濁流は最初の対面について詳しく記述している。

> 日本について百科辞典の如く知っている部長さんは直ぐ話題を東京へ持って行かれた。東京に疎い記者は尠らず面くらってしまった。
>
> 私共はサロンの隣りの食堂へ案内されて御馳走になり、主客合せて七人、山海珍味、短い夏の宵は更けるままに豪飲した。陳部長はしきりに大杯を傾けていた。それに応じて私共も斗酒をも辞せない意気込みで飲み興じていた。（中略）
>
> その晩、西島さんの招待に応じて第二次会を三和で午前二時まで歓を尽したのも国府要人

中には余り例のないことで、又氏に会えば何時も快く語るのも魅力の一つである[45]。

呉濁流は南京要人のなかで珍しく一緒に酒を飲んだ陳羣に対して、「日本について百科辞典の如く知っている」、「豪快な詩人」などの褒め言葉を使っている。

●『台湾連翹』

『台湾連翹』では「この人のほらを吹くのに長けていることについては、本当に驚かされた」[46]と嘲笑している。また、陳羣との対面についても言及している。第1回については、以下のように述べている。

その後、彼は大陸新報の記者を招待したことがあった。陳羣という人はお酒を飲む達人であるため、私も選ばれて西島社長、上野編集主任と一緒に招待に応じて出席した。お互い豪飲な人であるため、杯を交わしながら深夜の12時過ぎまで飲んだ。第二回の会面[47]は大陸新報が彼を奢り、夜明けまで日本料理「三和」で派手に飲み食いした。私たちは完全に酔っ払った。毎日文章を書き、一冊の本を読む人は、こんなにも酒を飲むのかと、私に疑いを起こさせた。彼がよく自慢していた蔵書三十万冊に至っては、事実である。どうせ考えずにその「政治家」たちの話を信じると、往々にして彼の宣伝に陥ってしまう[48]。

そして陳羣について、呉濁流は以下のように述べている。

彼は毎日本1冊を読んで、文章1篇を書いていると耳にした。

ある日、私は中澤君と一緒に彼を訪問に行った。談話中、彼はずっと自己宣伝に溺れていて、最初は面白いと感じさせたが、ずっと聞いていると、疑いをこさないわけにはいかず、聞き続けることができなくなって急いでいとまごいをして家に戻った[49]。

以上に述べたように、呉濁流は陳羣に「ほらを吹くのに長けている」と嘲笑し、彼が言ったことに対して「自己宣伝」と疑っている。ここから、呉濁流の陳羣に対する評価は「日本について百科辞典の如く知っている」、「豪快な詩人」から、「ほらを吹くのに長けている」、「自己宣伝」の人に変わったのである。

⑹ 梁鴻志

●「南京要人印象記」[50]

梁鴻志篇は汪精衛篇と同じく、彼が作った詩を何篇も文章に載せている。しかも、「南京要人印象記」の最後の1篇として、字数も内容も少なくはない。梁鴻志篇も珍しく「南京要人印象記―梁院長の大人ぶり」というサブタイトルがついている。サブタイトルの「大人ぶり」について、呉濁流は以下のように述べている。

支那大官と云えば所謂「大人」でどっしりしていて高邁なもので落着があって春風駘蕩た

る所が特長であったが之れも時代とともに此のような大人ぶりはもう過去の物語に過ぎず、現在では此のようなタイプを南京要人中に強いて求めようとすれば恐らく監察院長梁鴻志氏であろう[51]。

「南京要人印象記」では、梁鴻志とは3回対面したことを記述している。第1回の対面は1941年3月下旬、国府外交部主催の園遊会であった。ここで、梁鴻志は同じく漢詩が好きな呉濁流に好感を持つようになった。第2回の対面について、呉濁流は「福州が陥落したニュースが南京に伝はいや、私はすかさず観察院に馳せ参じ、氏の談話を求めた」と述べている。そして、呉濁流は梁鴻志に対して、「福々しい童顔、どっしりした態度は所謂支那大人そのもので、訛りのない北京語と温厚な接待ぶりは一層その感じを強めるのであった」と述べている。第3回は駐独呉大使の赴任披露茶会で、「氏が近かづいて来たので私が早速挨拶すると温厚な顔で「君は未だ大陸新報社に居るのか。未だ何処の役所にも入らないの」等と云うように実は親切であった」と記述している[52]。

「南京要人印象記」では、呉濁流は梁鴻志と何回も会い、梁鴻志も呉濁流に好感を持っていたことがわかる。呉濁流は「南京要人の中で屈指の漢詩人」、「親切」、「温厚な接待ぶり」などの言葉で、梁鴻志を称賛している。

●『台湾連翹』

『台湾連翹』にも梁鴻志との初対面についての言及がある。

維新政府の主席梁鶴志との第一回の対面は陵園の遊園会であった。（中略）彼は昔の官僚の雰囲気があり、北京語はうまく、彼の外見は人に大官であることを感じさせるが、人に新しさ、進取な感じを与えないし、目前の情勢を片付ける力すらも備えておらず、過去の人物であると感じさせる[53]。

ここで注意すべきなのは、梁鴻志の名前を間違えて「梁鶴志」と書いていることである。梁鴻志の印象は、「南京要人印象記」の「南京要人の中で屈指の漢詩人」、「温厚な接待ぶり」から、「人に新しさ、進取といった感じを与えないし、目前の情勢を片付ける力すらも備えていない」という評価に変わっている。「大人ぶり」という評価も「南京要人印象記」のなかの褒め言葉という印象から変化が起きていることがうかがえる。

2. 小結

呉濁流の「南京要人印象記」と『台湾連翹』の比較によって、汪精衛をはじめ6名の南京要人に対する印象は以下の3つの種類にまとめられる。

⑴ 汪精衛と陳公博――態度変わらず

「南京要人印象記」と『台湾連翹』の2作を比較すると、汪精衛と陳公博に対する態度はあまり変わっていない。汪精衛に対しては2作とも「先生のようである」ということを記述しており、

尊敬の気持ちがうかがえる。また、陳公博に対する印象は「学者」や「実直豪健」とあまり変わっておらず、好感を持っていることがうかがえる。

⑵ 周仏海、陳羣――態度が一転している

「南京要人印象記」では、基本的には賛美する立場で書いているが、周仏海、陳羣の 2 人は『台湾連翹』では酷評されている。前者では周仏海の容貌を称賛しているが、『台湾連翹』では皮肉を述べ、反感を持っていることがうかがえる。また、「南京要人印象記」で「豪快な詩人」と評価された陳羣は、「ほらを吹くのに長けている」と嘲笑している。

⑶ 褚民誼、梁鴻志――より客観的な記述

褚民誼、梁鴻志に関しては、2 作とも「子供のよう」、「大人ぶり」という印象を持っているものの、「南京要人印象記」と『台湾連翹』では意味するところが異なっている。褚民誼は「南京要人印象記」のなかで「調和性に富み」、「八面玲瓏」など賛美しているものの、『台湾連翹』のなかでは「発音は田舎っぽく」と述べられている。また、梁鴻志に対する「南京要人の中で屈指の漢詩人」、「温厚な接待ぶり」（「南京要人印象記」）の印象から、「目前の情勢を片付ける力すらも備えていない」（『台湾連翹』）の評価が変化した。しかし、周仏海、陳羣に対する反感とは異なって、褚民誼、梁鴻志に対してはより客観的だと考えられる。

本節は呉濁流の「南京要人印象記」と『台湾連翹』における南京政府要人に対する印象の異同を比較し、3 種類に総括した。では同一人物に対して前後の作品で記述の差異が存在する原因は何であろうか、第 2 節ではこの問題を中心に論じる。

第 3 節　呉濁流の南京要人に対する印象が変化する原因について

前節で述べたように、「南京要人印象記」と『台湾連翹』における南京政府要人に対する印象と面会についての記述は重複する部分が存在するが、この 2 作の間で呉濁流の評価がかなり変化していることもわかる。すなわち、「南京要人印象記」では全体的に高く評価する一方で、『台湾連翹』では好感も反感もより鮮やかに描かれている。それでは、呉濁流の南京要人たちに対する印象が変わった原因は一体何であろうか。その印象に対する変化から、呉濁流の創作意識などについて新たに見出せるだろうか。本節では「南京要人印象記」と『台湾連翹』の創作や発表の背景、呉濁流と南京国民政府の関係、そして呉濁流の南京要人への印象の形成について、この 3 つの方面から議論を広げたい。

1. 印象変化の原因について

⑴　2 作の創作・発表背景から見る呉濁流の創作意識

先述したように、『台湾連翹』は小説家としての呉濁流が 1971 年 9 月より書き始め、1974 年 12 月 29 日に完成した作品である。1973 年、呉濁流が林鍾隆に頼んで『台湾連翹』第 1 章から第 8 章までを中国語に翻訳してもらい、1973 年 4 月より『台湾文芸』に連載した。呉濁流の大陸経験や南京要人についての印象は第 7 章で書かれている。一方で「南京要人印象記」の第 1 篇であ

る汪精衛篇は『台湾芸術』第36号に掲載され、呉濁流が『大陸新報』の記者という身分から脱した翌年、1943年4月1日に発表された。『台湾連翹』の前半部分（1章～8章）が連載された1973年までに、30年の時が経っているのみならず、この2作を創作していた時期は、作者である呉濁流の身分も大きく変わった。

1942年から1943年に連載した「南京要人印象記」は日本統治期に、1973年から連載した『台湾連翹』は光復後の国民党が統治している時期に発表したものである。

すなわち、「南京要人印象記」を創作、発表していた1943年は、南京汪精衛政権が日本政府の支持を得て、日本と友好関係を結んでいた時期である。呉濁流は日本統治下の台湾で作品を連載するために、南京政府要人たちについては基本的には肯定する角度で描写していたことが理解できる。しかし、国民党が統治している1973年には、かつて蔣介石と対立していた南京汪精衛政府の形象はもうすでに維持する必要がなくなっていた。さらに呉濁流が描いた6人の南京政府要人のなかで、陳公博、褚民誼、陳羣、梁鴻志の4名は蔣介石国民政府によって「漢奸罪」で死刑にされている。この時期に南京汪精衛政府の要人たちを褒めることはむしろ敏感な問題となってしまう。要するに、この2作とも複雑な社会背景のなかで創作した作品なのである。

本稿の冒頭で述べたように、「南京要人印象記」と同じく『台湾芸術』で発表した「南京雑感」は後に『呉濁流選集』に翻訳・収録されたが、「南京要人印象記」は収録されていない。それに関して、白筱薇は以下のように述べている。

> あまりにも多く日中戦争と南京汪政府に関する話題に触れているために、これが中国語の訳本からその文章が削除された原因であろう。（中略）
>
> ここから、上述した初出の一部分が戦後の中国語の訳本に収録されていない原因は国民政府にとって敏感な汪精衛と彼の政権に関する内容であったためということが理解できる[54]。

白が述べたように、政治の影響を受け南京要人に対して肯定的な「南京要人印象記」は、国民政府になってすでに政治的に不正確な作品となっており、確かに、1966年に出版した『呉濁流選集』には「南京要人印象記」が削除されている。その後、1967年に脱稿した回顧録の「無花果」はその第8章で呉濁流の大陸経験を描写しているが、南京政府や南京政府要人たちのことはほとんど言及していない。そこから、「南京要人印象記」が収録されなかったのはただの偶然ではなく、南京国民政府要人という敏感な話題を避けたい、あるいは他の原因による意図的な結果ではないかという推測が生まれる。

しかしながら、1971年9月より書き始めたもう一つの回顧録である『台湾連翹』では、南京国民政府要人という敏感な話題に正面から向き合っており、そこには大きく紙幅がさかれている。その南京国民政府と南京政府要人に対する評価は確かにほとんど否定的なものであるが、第1節で述べたように、蔣介石と対立していた汪精衛や、蔣介石によって死刑にされた陳公博に対する印象は、「南京要人印象記」の記述とあまり変わらず、称賛している。要するに、呉濁流は、1960年代後半の政治に敏感な話題を避けるという態度から、1970年初頭には当局に合わせるの

ではなく、政治的な顧慮をかなぐり捨て、政治的に「不正確」なことすらも執筆する態度に変わった。その変化の原因は一体何であろうか。

まずは『台湾連翹』の執筆経緯を振り返ると、『無花果』と『台湾連翹』はかなりの部分が重複している。では何故『無花果』を創作した後、再び『台湾連翹』を書いたのか。『無花果』の執筆経緯を振り返ると、1967 年末に、「無花果」を脱稿し、最初のうちは『台湾文芸』で連載し、無事に発行された[55]。当時の台湾はまだ戒厳状態で、二二八事件に関することはタブーであったため、1970 年 10 月に、単行本『無花果』が台北林白出版社より出版されると、翌年の 1971 年 4 月 12 日に台湾警備総司令部から「（六十）助維字第二三二〇號令」により発禁処分を受けることとなった[56]。巫永福はこの件について、「年老いた呉濁流は慌てふためいて、憤慨を示す一方で、落ち込むが仕方ないと言うそぶりを示し、実に可哀想であった」と記録している[57]。ここから、『無花果』の発禁は呉濁流にとって大きなショックであったことがうかがえる。

『無花果』が発禁された 5 ヶ月後、呉濁流は『台湾連翹』を書き始めた。『無花果』では一切の敏感な人名は姓のみで書かれているが、『台湾連翹』では直接名指して語られていて、より厳しい書き方で当局への批判や不満を表している。さらに、呉濁流の「民国 36 年から民国 38、39 年までの間、社会は大変複雑であった。若い作家たちはこれを経歴しなかったので、あの時代背景を理解しようとしても極めて難しいだろう。一世代上の作家たちがこの歴史を書かないと、真実が伝わることはないだろう」[58] という創作意識から見ると、褚昱志が言ったように、温和な諫言という態度で創作した『無花果』が発禁になったため、政府に対する信頼を失い、激怒した呉濁流は、『台湾連翹』で自身が知る限りの二二八事件の実情を思い切って述べた[59]。「南京要人印象記」の創作目的である「台湾人たちに中国大陸での見聞を紹介したい」と異なって、『台湾連翹』は真実を伝えるという創作目的を持っているのである。

呉濁流は『無花果』が発禁されたことにショックを受けて、再び発禁されることを自覚して、より厳しい態度で歴史を記述するために「二二八事件」のことを含めて『台湾連翹』を創作した。彼は『台湾連翹』を脱稿した後、原稿を鍾肇政に任せ、後半部分は 10 年或いは 20 年待ってから出版せよという遺言によって発表を 10 年間凍結させている。こうした点から考えてみると、凍結されていない『台湾連翹』の前半部分、政治的な顧慮をかなぐり捨て南京国民政府や要人たちに関する敏感な話題に触れる、当局に迎合しない傾向を現していても不思議なことではないだろう。

総括すると、①「南京要人印象記」と『台湾連翹』での南京要人に対する印象が異なるというのはこの 2 作の創作・発表背景と関わっている。②政治状況の変化によって、南京国民政府の形象を維持する必要がなくなっている一方、積極的な評価も行えなくなった。そのため、「南京要人印象記」が呉濁流の後の作品集から抜け落ちているというのは意図的な仕業ではないかという推測も生まれる。③呉濁流は 1960 年代後半には敏感な話題を避けるという態度を持っていたが、『無花果』の発禁によって、『台湾連翹』では政治的な顧慮をかなぐり捨て、率直に歴史を記述するという態度に変わったのである。それが『台湾連翹』では南京の要人たちに対する大幅な記述が、批判や称賛の両方が描かれた原因の一つではないかと考えられる。また、「南京要人印象記」

を創作していた時の呉濁流はまだ記者という身分の延長線におり、『台湾連翹』を執筆していた時期の作家としての身分とは異なっており、2つの政権に支配された作家の内的な矛盾も重要視しなければならないが、紙幅の都合や本稿における論旨の重点を考慮し、ここでは言及するのみに留めたい。今後は呉濁流の生い立ちなど、作家論の視点からも分析する必要があるだろう。

⑵　呉濁流と南京国民政府

1916年、呉濁流は台湾総督府国語学校師範部に入学し、そこで客家人であり同期生の鍾壬壽と知り合いとなった。「南京雑感」と「無花果」、『台湾連翹』では「章君」として、『呉濁流作品集――巻④ 南京雑感』では「鍾君」として登場する人物である。呉濁流は「南京雑感」で「南京へ行ったのは同期生の章君が居ったからである」[60]と述べている。南京汪精衛政府に就職していた鍾は、呉濁流が大陸に渡ったきっかけとも言える。鍾壬壽は広東省梅県出身と称して、南京汪精衛政府宣伝部に勤め、1942年に汪精衛とともに日本で活躍したことがある。香港が陥落した後、彼は汪精衛の妻陳璧君と一緒に廈門、汕頭を経由して香港に到着した。こうした経歴から南京汪精衛政府の重要人物であることがうかがえる。呉濁流は南京に居た最初の2ヶ月ほどは鍾公館で暮らしており、彼の大陸経験における重要人物であると言える。

また、鍾壬壽以外に、呉濁流が南京で暮らしていた時期に、頻繁に往来していた人物に彭盛木と余君の2人がいる。2人とも台湾人であり、汪精衛政府の官員である。彭は苗栗三義出身の客家人で、以前は「同文書院」の教授で、汪精衛政権が成立すると財政部の参議や周仏海の秘書を務めた。彭の妻は周仏海の妻楊淑恵と一緒に日本観光をしたこともある。また彭の妻は台湾で教員を務めていた際、呉濁流と会ったことがある[61]。呉濁流夫婦が南京で暮らしていた間は、彭盛木夫婦と仲が良く、「南京要人印象記」の陳羣篇にも、「ときたま彭太太と一緒に邦人経営の日本料理のご馳走を味わうことがある」という記述がある。そして「無花果」にも『台湾連翹』にも彭盛木が重慶のスパイと疑われて捕まった際、彭の妻が助けを求めるためにこっそり呉濁流の家に来たことが書かれており、ここで彭は呉濁流を信頼していたことがうかがえる。

余君は呉濁流の五湖時代の学生で、長期間満州に住んでいたが、汪精衛政権が成立すると南京で軍職を務めるようになり、その時にはすでに上校に昇進していた。「無花果」のなかで呉濁流は「私の生徒余君が時々来てよく世話をしてくれた。妻にとっては唯一の親しい人であり、ひまがあるごとにさみしがる妻を案内して、同郷人や友だち訪問して歩いてくれた。余君の家にも、何回となく招待されてごちそうになった」[62]と述べている。

以上に述べたように、呉濁流が南京でよく往来していた知り合いは、ほとんどが汪精衛政府に就職し、しかも汪精衛や陳璧君、周仏海といった南京の要人たちと付き合いがあり、南京国民政府で重要な位置を担っていた人間である。

また、当時呉濁流は『大陸新報』で仕事をしていたが、『大陸新報』について、以下のように述べている論文がある。

> 『大陸新報』は一九三九年元旦に発刊。それまで上海で刊行されていた邦字新聞『上海日報』『上海日日新聞』『上海毎日新聞』のうち、『上海日報』を買収・改題して成立した。（中略）、

その結果『大陸新報』は上海随一のマスメディアとして編成されることとなった。そしてその発行元である大陸新報社は、陸軍、海軍、外務三省と興亜院の後援で設立されており、実態は国策に加担した御用新聞社であったといえる[63]。

南京国民政府とかなり関係が深く、当時上海・南京のマスメディア『大陸新報』の記者であった呉濁流は、仕事の都合で南京の官員たちとの付き合いも頻繁であったということは理解しやすい。呉濁流は『台湾連翹』で「毎週必ず二三回報道資料を取材しに警察庁に行っていたため、課長一人ずつを熟知していた」[64] と述べている。また、首都警察廳長蘇成德については「彼はかつて私に山東玫瑰露を奢ってくれた。お互いに往来が親密で、かなり仲が良かった」[65] と述べている。

また、南京政府と親密な関係と持っていた呉濁流は、『台湾連翹』で親しい人から南京政府に関する話を聞いていたことに何度も言及している。以下に例を 2 つ挙げる。一つは、

ある晩、私は南京大陸新報の同僚と一緒に「うた菊」という料理屋でお酒を飲んでいた。あの頃ちょうど汪精衛が日本を訪問していた時期で、私の同期生の章君も汪精衛に従って日本で活躍していた。だから、このことは私たちの談話の資料となって、彼の伝聞を少なからず聞いた。隣で座っていた若い従軍記者から、小さい声で私に「章君という人は誠実で真面目で、人柄も悪くない、このような台湾人は中国に身を寄せて、日本軍部は各種の情報を獲得するために彼を利用する。これは最も適切なことだよ！」と言った[66]。

といったもので、もう一つは、

当時重要な物資は全部日本軍によって統制されていたため、日本軍側の許可を経由してないと、移動できなかった。したがって、辺鄙な場所から物資を運搬してきて、上海に送って売り出すと、十倍二十倍儲ける。この時まで余君は汪精衛政権の上校であった一方で、商売をやっているということを知らなかった[67]。

といったものである。それ以外にも、呉濁流は南京に暮らしていた時期に、知り合いと政治に関する話を討論したり、友人から汪精衛政府のことを聞かされたりするシーンがある[68]。

以上から、呉濁流が大陸に渡ったきっかけである鍾壬壽を始めとし、仲の良い友人にも仕事関係においても、南京国民政府の官員が多くおり、南京国民政府との関係が親密であったことがわかる。また、呉濁流はそういった人間関係のなかで、政府や政治に関する話もよく討論していた。それでは、呉濁流は南京国民政府に対する認識・態度はどのようなものであったのか。

実は、呉濁流は 1942 年に『台湾芸術』で連載された「南京雑感」のなかで、南京での知り合いの巫君の話を借りて南京国民政府官員に関することを記述している。

「白身（前歴のない人）から一躍して部長や院長になれる国柄で、うまく機会を掴まえれ

ば奏任官や勅任官になるのも決して難しくない。（中略）例えば中山県の県長を一年勤めれば安徽省の省長を十年やるよりもよい。安徽省の省長よりも撫湖や無錫の県長がよい。国民政府では財政部長の地位が一番でお次は上海市長ですから君に説明した所で分る筈がない」[69]。

また、台湾に戻った後、呉濁流は大陸での経験やこういった知り合いを手本として、代表作『アジアの孤児』の初版である長編小説『胡志明』を創作した。『胡志明』の第3篇では上述の巫君の発言がそのまま使用されている。主人公である胡志明はそのような考え方に対して不思議だと感じる一方で、このような人たちの前途を思うとき、「ぞっと総身に身の毛がよ立って来る」のであった[70]。こうした側面から南京国民政府の暗闇と混乱が容易に想像にされる。呉濁流の1940年代の作品から見ると、呉は南京国民政府やその政治に対しては必ずしも肯定的な態度ではないとうかがえる。

さらに、前節でも言及したように、『台湾連翹』のなかで、「ひょっとしたら汪精衛は傑出した人物であるかもしれない。しかし彼の周囲には、まったく人材がいなかったといってよい」と書いているように、南京汪精衛政府やその官員たちに対しては全体的に印象がよくなかったという1970年代の呉濁流の評価は、1940年代に書かれた「南京雑感」や『胡志明』とも一致していると考えられる。

したがって、以上に述べたように、呉濁流の南京での知り合いはほとんど南京国民政府の官員であり、友人との会話の際も、時には政治に関することに言及し、仕事の関係で南京国民政府と関わりも深かった。そうした原因で南京政府の暗部もよく知っていて、1940年代から最後まで、南京国民政府に対しては肯定的な態度ではなかったと推測される。それでは、何故「南京要人印象記」における南京要人については肯定的な評価をするのか。2.1で述べたように、日本統治期という「南京要人印象記」の創作や発表背景は当然その原因の一つと考えられるが、「南京要人印象記」での記述はただ発表するための妥協であったのだろうか。さらに、呉濁流は南京要人たちについてはただその官員としての身分に基づいて評価していたのか。次はそれに関して詳しく論じる。

⑶ 南京要人に対する印象の形成

すでに述べたように、呉濁流は南京国民政府やその官員たちに対して全体的に印象が良くなかったといえるが、「南京要人印象記」ではその6人の要人に対して肯定的な評価をしていた一方で、『台湾連翹』では態度を一転させており、かなり変化したと言える。

第1節では呉濁流が描いた南京要人を3つの種類に分けた。「南京要人印象記」と『台湾連翹』の2作のなかで、印象が変わっておらず、つねに肯定的な態度で記述された汪精衛と陳公博、印象が大きく変化して、皮肉や批判を以て記述された周仏海や陳羣、そしてより客観的な印象で評価されている褚民誼、梁鴻志の3種である。

もし「南京要人印象記」がただ発表するための妥協で、呉濁流の南京国民政府官員に対する印象が全体的に良くないのであれば、何故『台湾連翹』のなかで汪精衛と陳公博に対する態度は称

賛したままで変わらないのか、以下、呉濁流のその6人の要人に対する印象を分析しながら、その問いに応答してみよう。

① 汪精衛と陳公博――態度変わらず

前述したように、「南京要人印象記」は汪精衛を初めに比較的に印象の鮮やかな方から書いているため、連載された順番が最初と2番目である汪精衛と陳公博に対しては、呉濁流は比較的印象が鮮明であったことがわかる。

呉濁流の作品によると、汪精衛と会ったことは3回ある。呉濁流が最初に汪精衛を見た時は、全国中央宣伝会議で「講老実話（真実な話）」という講演をしていた汪精衛に対し「理論が整然として無駄な修飾辭を用ひず洗煉された言葉を用ひて悠然迫らざる態度で諄々と所信を述べる所は丁度先生が弟子を導くように感じるのであった」という印象をもったことが記述されている。

また、2度目に汪精衛を見たのは「第四回全国中央委員会議」であり、南京政府要人たちと一緒に中山陵に赴いた際、呉濁流は南京の市場には何処でも売っている木綿の靴下を履いた汪精衛に対して、「此程の身分に拘はず贅沢をされない」、尊敬の気持ちを表している。

さらに、『台湾連翹』では、汪精衛ともう一度の面会が描かれている。ここでも「温和」や「自分の先生と対面しているよう」といった言葉で形容している。

要するに、呉濁流は汪精衛に対する印象を述べる際には、講演や談話から、汪に対し先生のような印象を残したり、木綿の靴下を履いている姿という細かい点から、汪に敬意を生じたりしていることなど、主に呉濁流の個人的な視角から汪精衛を語っていることがわかる。

また、陳公博については「南京要人印象記」でも、『台湾連翹』でも、ほぼ同じ内容を描写しているため、呉濁流は陳公博と対面した回数は多くないと思われる。

呉濁流の作品を読むと、彼はよく客家人という身分を強調し、周りにも客家人の人脈が多いことがわかる。『台湾連翹』では陳公博が同じく客家人であることから、陳に対し特別な好感を持っていると述べているが、では何故同じ客家系の陳羣に対しては否定的な評価にとどまっているのだろうか。「無花果」を読むと、彼はよく自分の性格を「頑固」、「衝動的」、「執拗」と描いていることに気がつく。そして、呉は「南京要人印象記」で陳公博を「頑固な執拗」は「客家の気質」[71] と書いていることから、血統的な客家人であるかどうかより、彼と同じく物事に固執し、執拗であるということを重視したのではないかと考える。呉濁流は陳公博がそういった客家の性格を有していると判断したため、特別な好感を持ったのだろう。

次に、「南京要人印象記」と『台湾連翹』のどちらも、呉濁流は陳公博の九州大学での講演を褒めている。陳公博の「如何ニシテ日支ノ永久的和平ヲ図ルベキヤ」に関して一つの例を挙げる。

> 例えば米国の通用電気会社と欧米各国との合資は、仏蘭西（フランス）に在って一つは百分の十八を占め、一つは百分の十を占め、独逸（ドイツ）に在っては、一つが百分の三十を占め、一つが百分の十一を占め、オランダに在っては、一つのみが百分の二十を占めているにも拘らず、悉く管理権は取れてあり、資本の過半数の問題に関係しないことが証明されているのであります[72]。

以上の引用から、呉濁流が言うように、陳公博は講演のなかで中日経済合作についても抽象的理念ではなく、具体的な例を挙げて論じていることがわかる。実は経歴から見ると、陳公博は1924年にニューヨークコロンビア大学の経済学修士学位を取っていて、1925年に博士の単位を修得した後、経済的な原因で博士号を諦めたことが挙げられる。陳公博は確かに呉濁流が彼を称賛する際に使ったように「政治家と共に学者とも言える」ほどの学識を持っていると考えられる[73]。

以上のことから、呉濁流は陳公博に対しては政治的な身分から離れて、主に個人的な審美で好む客家人的な性格や学識の2方面から評価していることがわかる。

② 周仏海や陳羣――態度が一転している

前節で述べたように、汪精衛と陳公博に対する態度と異なり、周仏海や陳羣については、呉濁流は『台湾連翹』で「傲慢」だとか、「ほらを吹く」だとか、かなり皮肉を述べている。

『台湾連翹』では呉濁流が一人で周公館に肖像画を贈りに行った際、周仏海の「挨拶もしなかった」という冷淡な態度に言及している。呉濁流は、「もし私が日本人であれば、彼は必ず懇ろにもてなしていたであろう」、「周仏海も同様で、自分は中国人ではあるが、中国人の存在を認めない」と批判していた[74]。

呉濁流の身分や渡中動機から見れば、彼が何故厳しい態度で周を評価したのかが理解できる。まず、呉濁流は日本統治下で育った台湾人であり、『胡志明』からわかるように、差別について敏感な人である。そして『台湾連翹』で「したがって、私のような特別な身分を持っている人はここに来て、自由に憧れ、自尊を探求するために寂しく、失望し彷徨っている」[75]と述べたように、彼が大陸に渡った原因の一つは自由と自尊を探すことである。しかし、呉濁流は周仏海と対面した際、周の態度によって、差別されることを思い出し、尊重されていないと感じさせられた。そのような周仏海を嫌うのは当たり前のことであったろう。

さらに、興味深いのは、「南京要人印象記」のなかで、他の要人については、その人柄や学問などを褒めている一方で、周に対してはほぼ容貌を賛美するのみである。したがって、『台湾連翹』で周の人柄に対し批判しているのは、態度の変化が大きいように感じるものの、実はそこまで矛盾しているとは言えないだろう。

陳羣については、周仏海の息子である周之友が記述したように「1940年陳羣は東京に来て、私にご飯を奢ったことがある。彼のいわゆる学生を何人か呼んで来て、しばらく高談闊論をした」[76]。ここでも陳羣は宴会で空論を大いにまくし立て、長広舌をふるっていたことがうかがえる。

また、呉濁流は「南京要人印象記」で、陳羣に対する「日に本を一冊読み、且つ文章を一篇づゝ綴る」と述べており、また、陳羣と大陸新報の人たちと夜まで酒を飲んでいたことを書いている。明言はしていないものの、陳羣の発言と行動が矛盾していることを示していると考えられる。次に、『台湾連翹』において陳羣に対して何度も「自己宣伝」や「疑いが起きる」という表現を使って、その矛盾をはっきり書いていた。

ここから、呉濁流と対面した際に発生したことに対し、主観的な批判を行っていることがうかがえる一方で、「南京要人印象記」では、確かに賛美している態度を取りながらも、その重点を

ずらしているか、もしくは矛盾を提示するなどの方法で、呉濁流は戦略的な書き方をしていたことがわかる。

③ 褚民誼、梁鴻志――より客観的態度

最後に、褚民誼、梁鴻志についてであるが、「南京要人印象記」と『台湾連翹』の 2 作とも褚民誼は子供っぽいとか、静かに喫茶店に座って玄武湖を見るといったことなどを述べているが、そこには主観的な評価はほぼない。梁鴻志については『台湾連翹』でも彼の詩がうまいという評価があり、「南京要人印象記」のなかでも梁の詩を何首も並べていることから、この 2 人に対する印象は悪くないことがわかる。

褚民誼について、呉濁流は『台湾連翹』のなかで「汪夫人の妹婿」だとか、「お人好し」とか、「大孩子」などの言葉で形容している。『周仏海獄中日記』[77] のなかでは、褚民誼が死刑にされたことを知った周仏海も「民誼がまともでない死に方をした。お人好しがこの結末だとは、天道があるとでもいうのか」[78] とある。また、周仏海日記によれば、周は 1940 年 3 月 21 日に、汪精衛から褚民誼を海軍部長に任命するつもりだという連絡が来て、「汪先生から連絡がきて、まだ民誼を海軍部長に任命するつもりだ。このことは私と公博は極めて反対であるが、汪先生はどうしてもしたいようで、まことにたえがたく、椒房の害[79] である」[80] と記述している。翌日、周は日記に「公博と一緒に汪先生に拝見し、まだ民誼を海軍部長に担当させることに反対し、結局彼のメンツをなんとか取り繕うために、暫く外交部長にした。この行動はもちろん適切ではないが、海軍部よりは、比較的そこまで滑稽にはならない」[81] と述べている。

以上のことから、汪精衛の妻の妹婿である褚民誼は能力が足りず、親戚という関係から汪精衛政府の要人となっていたが、当時の評判から、いわゆる「顧預」[82] な人とみなされていたということが理解できる。ここから、呉濁流が『台湾連翹』において褚民誼に対して「汪夫人の妹婿」で「確かに大孩子である」という評価をしたのも理解がいく。いわゆる、「南京要人印象記」における「子供っぽい」は特別な意味がないが、むしろ『台湾連翹』のなかでは、「能力不足」などの意味を含むのではないかと考えられる。

また、梁鴻志については維新政府の主席として、「南京要人印象記」であれ、『台湾連翹』であれ、共通して梁の詩がうまいと述べていたことから、呉濁流は詩人として認めていたことがわかる。また、旧日本軍参謀本部で中国担当だった山崎重三郎が梁鴻志について、「旧社会の遺老か、中国共産党や国民党政府でいらない三流の役柄である」、「思想で敗戦した人たちの組織であり、この人たちで時局を片付けられるわけがない」[83] と述べているように、当時の見解では梁鴻志についてそういった評価をしていたことがうかがえる。呉濁流が『台湾連翹』のなかで梁鴻志を「人に新しさ、進取といった感じを与えないし、目前の情勢を片付ける力すらも備えておらず、過去の人物であると感じさせる」と評価したのは、そうした世間の評判の影響を受けた可能性が高い。「南京要人印象記」では梁に対し「大人ぶり」と述べたが、『台湾連翹』での「大人」は目前の情勢を片付ける力が備えていなく、「過去の人物」という別の一層の意味を持っているのではないだろうか。

以上に述べたように、呉濁流の南京要人たちに対する印象は多方面からの要因で形成されてい

たことがわかる。呉濁流の彼らに対する印象には、要人たちの政治身分を別にして、人柄という方面から、要人たちと対面した際に発生したことへの主観的な判断を行っていることがうかがえる一方で、「南京要人印象記」で要人たちについて記述する際には、確かに褒めている態度を取っていたが、その重点がずれているか、明言せずに矛盾を提示するか、あるいは同じ言葉であるものの「南京要人印象記」と『台湾連翹』で異なる意味を持っていることなど、戦略的な書き方で記述していることがわかる。さらに、南京要人たちへの印象は周囲の評判や見解などの影響を受けた結果でもあることがうかがえる。

2. 小結

以上に述べたように、本節は呉濁流が「南京要人印象記」と『台湾連翹』で、同一人物に対して異なる印象を記した原因を、作品の創作や発表した際の背景による影響、また呉濁流と南京国民政府との関係や南京国民政府に対する態度、そして呉濁流の南京要人への印象の形成についての 3 つの方面から分析した。

呉濁流の南京要人たちに対する印象は多方面からの要因で形成されていた。まず、「南京要人印象記」と『台湾連翹』での南京要人に対する印象が異なるというのはこの 2 作の創作・発表の背景と関わっている。また、呉濁流は南京国民政府と関わりも深く、南京国民政府に対し肯定的な態度ではなかったと推測する。さらに、呉濁流の南京国民政府要人たちに対する印象には、要人たちの政治身分を別にして、人柄などの方面から、対面した際に発生したことへの主観的な判断を行っていることがうかがえる一方で、「南京要人印象記」で要人たちについて記述する際には、確かに褒める態度を取っていたものの、その重点がずれているか、明言せず矛盾を提示するか、同じ言葉でも「南京要人印象記」と『台湾連翹』で異なる意味を持っているかなど、戦略的な書き方で記述していたことがわかる。さらに、そうした南京要人たちへの印象は周囲の評判などの影響を受けた結果でもある。

終わりに

本稿はこれまでの呉濁流研究が主にアイデンティティや『アジアの孤児』に研究が集中している状況に対して、新たな方向による呉濁流研究の可能性を提示することをねらいとした。本稿は主に呉濁流が大陸から台湾に戻ったその年から『台湾芸術』に連載されていた「南京要人印象記」に注目し、それをめぐって論述を広げた。本稿の冒頭で提起した問いに立ち戻って、本論での比較分析を通して、それにこたえてみよう。

まず、「南京要人印象記」が作品集などから抜け落ちているということはただの偶然ではなく、呉濁流が南京国民政府要人という敏感な話題を避けようとしていたと考えられ、「南京要人印象記」が呉濁流の後ほどの作品集から抜け落ちているということも意図的な仕業ではないかと考えられる。

次に、この「南京要人印象記」と『台湾連翹』の比較から、呉濁流の 6 名の南京要人たちに対

する印象はあまり変わっておらず、かつ称賛の態度で記述された汪精衛と陳公博、褒める態度から皮肉を込めた評価となり、かなり変化した周仏海、陳羣、同じ言葉が使用されているものの異なる意味を持ち、より客観的な態度で描かれた褚民誼、梁鴻志、この3つの種類が存在することがわかった。

そして、南京要人たちに対する印象の変化は多方面の原因が相互作用をした結果でもあったが、主に創作や発表する背景の影響を受けた結果であり、呉濁流の要人たちの人柄や官員という身分を分けてみていた傾向も重要視しなければならない。

最後に、南京要人たちに対する印象の変化から、以下2点が見出せる。① 1960年代後半の敏感な話題を避けるという態度が、『無花果』の発禁によって、呉濁流は『台湾連翹』の創作から政治の顧慮をかなぐり捨て、率直に歴史を記述するようになったという傾向がある。②呉濁流は「南京要人印象記」の発表のために妥協をしたが、人物に対する褒め立てる重点をずらすか、同じ言葉を使うものの後の作品で異なる意味を持たせるなど、戦略的な書き方で少なくても時勢への迎合を避ける記述をしている。

本稿の達成点は以上となっている。残念ながら、紙幅の原因でまだ言及できていない箇所がある。

例えば、陳公博篇に関する考察で述べたように、呉濁流は作品のなかで「客家」という言葉を繰り返し言及し、自身の客家の血統を強調していることから、彼は客家の人脈も大事にしているようである。呉濁流は自身の大陸経験において客家人という身分や客家の人脈を如何に活用しているのかについては今後さらに検討が必要である。また呉濁流の回顧録に記述されている南京国民政府に就職していた台湾人、鍾壬壽、彭盛木、黄自強、そのほかの呉濁流と知り合いかつ南京国民政府に勤めていた台湾人を切り口とすれば、そうした側面からも呉濁流の大陸経験に関する研究に新しい発見をもたらすことができる可能性もあると考えられる。

付記

本稿は一橋大学言語社会研究科韓国学研究奨励費の助成を受けたものである。また本稿は第22回日本台湾学会学術大会分科会での報告を修正したものである。研究発表の際、コメンテーターの河原功先生、座長三木直大先生、指導教員である星名宏修先生から多大なご教示をいただいた。本研究は白井魁氏から資料提供をいただいた。また、本稿の修正過程において、査読者及び編集委員の先生方からも貴重なコメントをいただいた。深く感謝を申し上げたい。

注

1　呉濁流『アジアの孤児―日本統治下の台湾』新人物往来社、1973年。
2　呉濁流「後記」『台湾連翹』草根出版社、1995年、259-260頁。
3　呉濁流『台湾連翹』年代文庫、1987年。
4　呉濁流「悼江肖梅兄」『台湾文芸』第11期、1966年、52頁。
5　黄郁綺「江肖梅所編民間故事集之研究」中国文化大学中国文学研究所、2009年、13頁。
6　汪精衛が取り上げられた回だけは「国府要人印象記」として発表されているが、次回の陳公博篇からは「南京要人印象記」と改められている。
7　呉濁流「自序」『台湾連翹』年代文庫、1987年、6頁。
8　銭鴻鈞『呉濁流致鍾肇政書簡』九歌出版社有限公司、2000年、256頁。

9 褚昱志「附録一　呉濁流生平大事記及寫作年表」『呉濁流及其小説之研究』秀威資訊科技、2010 年、233-239 頁。
10 呉濁流「無花果」『中国』第 66 号、1969 年、63 頁。
11 呉濁流『胡志明』『呉濁流作品集』緑蔭書房、2007 年。
12 呉濁流『呉濁流作品集－－③ 波茨坦科長』遠行出版社、1977 年。
13 表 1 は筆者作成である。
14 原文は昭和 18 年 12 月 28 日、誤記である。
15 簡義明「呉濁流研究現況評介与反思――以台湾的研究成果為分析場域」『台湾文芸』159 期、1997 年、8 頁。引用者訳。以下、本稿での引用の原文が中国語である場合の翻訳は筆者によるものである。
16 林柏燕「呉濁流的大陸経験」『郷土与文学：台湾地区区域文学会議議実録』文訊雑誌社、1994 年、334-356 頁。
17 徐千惠「日治時期台人旅外遊記析論――以李春生、連横、林献堂、呉濁流遊記為分析場域」国立台湾師範大学国文系碩士論文、2002 年。
18 陳室如「日治時期台人大陸遊記之認同困境：以連横《大陸遊記》与呉濁流《南京雑感》為例」『人文研究学報』第 41 巻第 1 期、2007 年、33-50 頁。
19 白筱薇「呉濁流的大陸経験及其相関作品研究」国立政治大学台湾文学研究所碩士論文、2013 年。
20 周仏海『周仏海日記』中国文聯出版社、2003 年。
21 蔡徳金編『汪精衛生平記事』中国文史出版社、1993 年。
22 同上書、32 － 34 頁
23 呉濁流「国府要人印象記」『台湾芸術』第 36 号、1943 年、32 頁。
24 講老実話：真実の話。
25 呉濁流「国府要人印象記」『台湾芸術』第 36 号、1943 年、32 頁。
26 同上紙、32 頁。
27 同上紙、33 頁。
28 呉濁流『台湾連翹』年代文庫、1987 年、97 頁。
29 同上書、98 頁。
30 呉濁流「南京要人印象記」『台湾芸術』第 37 号、1943 年、28–29 頁
31 同上紙、28–29 頁。
32 同上紙、29 頁。
33 呉濁流『台湾連翹』年代文庫、1987 年、98-99 頁。
34 呉濁流「南京要人印象記」『台湾芸術』第 38 号、1943 年、26 頁。
35 同上紙、26 頁。
36 同上紙、26 頁。
37 呉濁流『台湾連翹』年代文庫、1987 年、97 頁。
38 同上書、97 頁。
39 同上書、97 頁。
40 呉濁流「南京要人印象記」『台湾芸術』第 39 号、1943 年、34 頁。
41 同上紙、34 頁。
42 呉濁流『台湾連翹』年代文庫、1987 年、98 頁。
43 呉濁流「南京要人印象記――陳内政部長の豪華ぶり」『台湾芸術』第 40 号、1943 年、32 頁。
44 同上紙、32 頁。
45 同上紙、32 頁。
46 呉濁流『台湾連翹』年代文庫、1987 年、115 頁。
47 「南京要人印象記」では二次会であるものの、『台湾連翹』のなかでは第二次会面と記される。
48 呉濁流『台湾連翹』、前掲書、102 頁。
49 同上書、102 頁。
50 呉濁流「南京要人印象記――梁院長の大人ぶり」『台湾芸術』第 41 号、1943 年、34 頁。
51 同上紙、34 頁。
52 同上紙、34 頁。
53 呉濁流『台湾連翹』年代文庫、1987 年、100 頁。
54 白筱薇、前掲論文、44-45 頁。
55 『台湾文芸』第 19 期、20 期及び 21 期、1968 年 4 月、7 月、10 月。
56 鐘玉芳「「無花果」記事」『無花果』草根出版社、1995 年、序文。

57　巫永福「也為呉濁流的『無花果』辯白」『走出歴史的陰影』、1986 年、151 頁。
58　呉濁流「後記」『台湾連翹』、273 － 274 頁。
59　褚昱志、前掲書、225 頁。
60　呉濁流「二、南京の第一印象」「南京雑感」『台湾芸術』第 31 号、1942 年、29 頁。
61　呉濁流『台湾連翹』年代文庫、1987 年、104 頁。
62　呉濁流「無花果」『中国』第 67 号、1969 年、56 頁。
63　木田隆文「武田泰淳の上海体験――現地日本語媒体とのかかわりから」『奈良大学紀要』第 39 号、2012 年、73-88 頁、78 頁。
64　呉濁流『台湾連翹』年代文庫、1987 年、101 頁。
65　同上書、101 頁。
66　同上書、92 頁。
67　同上書、95 頁。
68　同上書、91 頁、92 頁、96 頁。
69　呉濁流「三、三畏里の閑話」「南京雑感」、『台湾藝術』第 32 号、1942 年、30 頁。
70　『胡志明』、190 頁。
71　呉濁流「南京要人印象記」『台湾芸術』第 37 号、29 頁。
72　石源華「陳公博九州帝国大学における講演「如何二シテ日支ノ永久的和平ヲ図ルベキヤ」」『史学研究』第 194 号、97 頁。
73　黄美真編『汪偽十漢奸』、上海人民出版社、1986 年、143-145 頁。
74　呉濁流『台湾連翹』年代文庫、1987 年、98 頁。
75　同上書、90 頁。
76　周之友「我所知道的漢奸周仏海」、沈醉　徐肇明著『漢奸内幕』中国文史出版社、2010 年、183 頁。
77　周仏海『周仏海獄中日記』中国文史出版社、1991 年。
78　同上書、9 頁。
79　椒房の害：椒房は皇后、皇妃のことである。ここでは汪精衛が妻陳璧君との関係から能力がない褚民誼を任用したことを指す。
80　周仏海『周仏海日記』中国文聯出版社、2003 年、269 頁。
81　同上書、269-270 頁。
82　顦頇：ボサっとしている。
83　山崎重三郎「中共在華北的遊撃戦」『幹部学校記事』第 113 期、1963 年、58 頁。

（2020 年 10 月 15 日投稿受理、2021 年 3 月 1 日採用決定）